

---

 原著論文
 

---

# 目指す「おとな像」と「対おとな認知」の特徴と、それらに及ぼす「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」の影響に関する研究

荒 尾 貞 一

北里大学獣医学部

菊 地 則 行

会津大学文化研究センター

---

## 要旨

本研究の目的は以下の通りだった。第1に、目指す「おとな像」の諸側面を抽出し、いかなる「おとなとの共同体験」「おとな処遇体験」が、目指す「おとな像」形成に関係しているかを検討すること。第二に「対おとな認知」の諸側面を抽出し、いかなる「おとなとの共同体験」「おとな処遇体験」が「対おとな認知」に関係しているかを検討すること。

目指す「おとな像」「対おとな認知」「おとなとの共同体験」「おとな処遇体験」について大学2年生に調査した。

目指す「おとな像」「対おとな認知」の結果に因子分析を施し、それぞれ3因子、4因子を抽出した。目指す「おとな像」「対おとな認知」それぞれの評定点合計を従属変数、「おとなとの共同体験」「おとな処遇体験」の各項目の評定点を独立変数として重回帰分析を適用し、目指す「おとな像」「対おとな認知」それぞれの形成に影響を及ぼす「おとなとの共同体験」「おとな処遇体験」を抽出した。

目指す「おとな像」と「料理や買物などの家事手伝い」(おとなとの共同体験)、「おとな同士の態度で接する」「祭りや行事などで責任ある地位」(おとな処遇体験)が有意な関係があった。

「対おとな認知」と「趣味やゲーム・スポーツ」「料理や買物などの家事手伝い」(おとなとの共同体験)、「年下の者があてにする」(おとな処遇体験)が有意な関係があった。

キーワード：おとな、おとな像、対おとな認知、共同体験、処遇体験

---

## I. 問題と目的

荒尾・菊地<sup>1,2,3,4</sup>、菊地・荒尾<sup>5</sup>は、青年が「おとなになっていく」心理的プロセスを、おとな像・人間像の特徴と、青年とおとなとの関係に着目して検討してきた。本研究では、目指す「おとな像」と「対おとな認知」の特徴と、それらがおとなとのどの様な体験の中で形成されているのかを検討する。

荒尾・菊地<sup>3</sup>では、中学生、高校生、大学生を調査対象として、彼らの目指す「おとな像」・人間像の特徴を、自由記述で得られた結果から検討した。そして、目指す「おとな像」・人間像の主要な側面（多くの者から目指される側面）として次の3つを指摘した。1.「精神的自律」、2.「生活的自立」、3.「対人的・社会的かかわり」の3つの側面である。

「精神的自律」とは次の様な2つの下位カテゴリーの内容を含むものである。つまり、「自分の感情をコントロールできること」、「よいこと悪いことの区別ができること」などの「精神的成熟」（以下、下位カテゴリーを〔 〕で表記する）。「自分のやりたいこと、やらなくてはならないことを自分で選べること」、「何か困難に直面しても、自分の判断で解決できること」などの「自己決定」である。

「生活的自立」とは、「働いて経済的に自立する（した生活をする）こと」、「自分の家族を守る（養う）こと」を主要な内容とするものである。

「対人的・社会的かかわり」とは、次の様な2つの下位カテゴリーの内容を含むものである。「人に思いやりを持てること」、「いろいろな人とスムーズにつき合えること」などの「対人関係」。「仕事に真面目に取り組んでいること」、「社会的役割を自覚していること」などの「社会的役割」である。

ただし、これらの側面の考察は、調査者が設定したカテゴリーによって、自由記述の回答を分類した結果を基に行なったものである。したがって、自由記述の回答は多義的な内容を含む場合が多く、その様な回答に対する分類の客観性の問題と、3つの側面という指摘が被調査者の内的次元として一致しているか否か、という視点での考察の妥当性の問題が残っている。したがって、結果の客観性を保障するために、これまでの調査で得られた回答を基に目指す「おとな像」・人間像の調査項目を作成する必要がある。そして、それを用いて得られた結果を基に、前述の視点からの考察の妥当性を検証する必要がある。

ところで、荒尾・菊地<sup>3</sup>では、目指す「おとな像」・人間像の形成因を探るために、次の点も検討した。それは、おとなの人とどの様なことを一緒に体験したことがあるか（「おとなとの共同体験」）、またおとなの人からどの様なおとな扱いを受けた体験があるか（「おとな処遇体験」）の検討である。

また、荒尾・菊地<sup>4</sup>では、中学生、高校生、大学生を対象に、おとなの人の良い点・見習いたい点、悪い点・見習いたくない点（「対おとな認知」）について検討した。これらを検討したのは、次の様な理由からであった。

つまり、青年がおとなになっていく過程は、その社会・教育制度などに大枠として規定されながら、周囲のおとなとの関係に規定され、かつその関係を変更していく中でなされるものであると考えるからである。以上の意味で、おとなとの関係は重要な要因であると考えられる。

ここでいうおとなとの関係とは、次の3つの事柄をさしている。1つは、実際に結び合っている客観的人間関係である。本研究では「おとなとの共同体験」として取り上げて

いる。また、1つは、客観的人間関係の中で形成されるおとなに対する認知のことである。本研究では「対おとな認知」として取り上げている。そして、1つは、その関係に対する青年の意味づけである。本研究では取り上げないが、荒尾・菊地<sup>4</sup>では、それを「おとなとの共同体験志向性」、「おとな処遇志向性発生状況」などとして検討した。このような意味でのおとなとの関係は、青年期の目指す「おとな像」・人間像の形成因として作用しているのではないかと考えられる。また、同時に、その関係によって、青年は、自分がおとなになっていくことを動機づけているのではないかと考えられる。

以上の理由から、「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」、「対おとな認知」にはどのようなものがあるかを、まず把握しようとしたのであった。そして、それぞれ、自由記述で回答を求めた結果、前者の体験で130の回答、後者の体験で116、「対おとな認知」で474（悪い点・見習いたくない点は274）の回答を収集できた。そして、それぞれの主な特徴を検討した。したがって、次に、収集整理された両体験の中で、どのような体験が目指す「おとな像」・人間像の形成に影響を与えているか検討する必要がある。ただし、その検討の際、目指す「おとな像」とそれをも包括する目指す人間像は区別されねばならない<sup>3</sup>。

また、目指す「おとな像」・人間像に「対おとな認知」が与える影響についても同様に検討する必要がある。しかし、「対おとな認知」に関する前調査での検討では、前述した目指す「おとな像」・人間像と同様な問題が残った。したがって、その検討の前に、「対おとな認知」の特徴を、目指す「おとな像」・人間像と同様の点を考慮して更に検討する必要がある。また、「対おとな認知」の特徴を多面的に検討する上で、その認知がどの様にして形成されているのかについても検討する必要がある。

そこで、以上の検討課題を踏まえて、本研究では次のことを目的とする。ただし、目指す「おとな像」と人間像のうち、まず前者に検討を限定する。

目的1：目指す「おとな像」の諸側面を抽出すること。そして、その側面の中に「精神的自律」、「生活的自立」、「対人的・社会的関わり」の側面が見いだされるか否かを検討すること。

目的2：目指す「おとな像」の形成に、どのような「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」が関係しているかを検討すること。

目的3：「対おとな認知」の諸側面を抽出すること。

目的4：「対おとな認知」の形成に、どのような「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」が関係しているかを検討すること。

## Ⅱ. 方法

### 1) 被験者

被験者は、北里大学獣医畜産学部（現獣医学部）2年生、203名（男：153名、女：50名）であり、その平均年齢は20.3歳（標準偏差2.42歳）であった。

## 2) 質問紙

質問紙法によって調査を実施した。質問紙は、1. 目指す「おとな像」、2. 周囲のおとなをどの様に認知しているか（「対おとな認知」）、3. 「おとなとの共同体験」、4. 「おとな処遇体験」に関する質問で構成した。

目指す「おとな像」と「対おとな認知」に関する項目は、荒尾・菊地<sup>1,2,3,4</sup>、菊地・荒尾<sup>5</sup>で収集した「おとな像・一人前像」、「目指す人間像」、「おとなのよいところ・見習いたい点」、「おとなの悪い点・見習いたくない点」の自由記述回答3065個、および成人性基準に関する先行研究<sup>6,7</sup>において用いられた項目を参考にして作成した。また「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」に関する項目は、荒尾・菊地<sup>3</sup>で収集した自由記述回答 246個（「おとなとの共同体験」；130個、「おとな処遇体験」；116個）を参考にして作成した。

各項目に対する回答は5件法で求めた。目指す「おとな像」では、「ほとんど考えていない」、「あまり考えていない」、「どちらともいえない」、「少し考えている」、「とても考えている」の選択肢にそれぞれ1点から5点までの得点を与えた。「対おとな認知」では、「ほとんどいない」、「あまりいない」、「どちらともいえない」、「すこしいる」、「たくさんいる」の選択肢にそれぞれ1点から5点までの得点を与えた。「おとなとの共同体験」と「おとな処遇体験」では、「ほとんどない」、「あまりない」、「どちらともいえない」、「少しある」、「たくさんある」の選択肢にそれぞれ1点から5点までの得点を与えた。

調査者が実施した先行研究において目指す「おとな像」と「対おとな認知」の項目が分類されたカテゴリーを表1と表3に示した。表中の各項目の後に記した小文字のアルファベットは次のカテゴリーを示している。

a. [精神的成熟]、b. [知的深まり]、c. [責任]、d. [自己主張]、e. [自己対象化]、f. [自己決定]、g. [社会的関わり]、h. [対人的関わり]、i. [生活的自立]、j. [対子ども]、k. [否定的おとな認知]

## 3) 調査実施の方法

調査実施期日は、1988年12月13日、14日、15日だった。

質問紙は、調査者の講義時間に被験者に配布し記入させた。十分な記入時間を確保するために30分の時間をとったが、ほとんどの被験者は約20分で記入を完了した。

## 4) 分析に用いた計算プログラム

因子分析及び回帰分析の計算には、田中ら<sup>8</sup>のプログラムを用いた。因子分析においては各因子の固有値と寄与率を出力するためにプログラムの一部を変更した。重回帰分析は変数増減法により行った。回帰モデルのあてはまりの良さを示すといわれる Mallows, C. L. の Cp値と赤池の情報量基準値(AIC)を考慮して、両値が最小となったモデルを選択した。

### Ⅲ. 結果

#### 1) 目指す「おとな像」の因子分析

目指す「おとな像」の質問項目35項目を主因子法によって因子分析し、固有値が1以上の因子3因子を抽出した。その後この3因子をバリマックス回転した。欠測値を含む被験者は分析から除外し分析対象者は195名であった。

各項目に対する因子負荷量ならびに各項目の平均値 (S.D.) を表1に示した。この3因子によって、全分散の約78%を説明することができた。

表1. 目指す「おとな像」の因子分析の結果と評定値の平均値及び標準偏差							
項	目 (カテゴリー)	F. 1	F. 2	F. 3	共通性	MEAN	S.D.
3.	自分の言ったことや行なったことに責任を持てる (c)	0.68	0.14	-0.17	0.52	4.5	0.84
22.	自分の良いところ、悪いところを判断できる (e)	0.68	0.31	0.08	0.57	4.1	0.97
2.	社会的モラル・常識を持っている (b)	0.66	0.08	-0.01	0.45	4.2	0.99
25.	自分の職業にやりがいを持って取り組んでいる (g)	0.65	0.27	-0.28	0.58	4.5	0.83
35.	物事を冷静に判断し、行動できる (f)	0.64	0.35	0.23	0.60	4.3	0.95
16.	自分の家庭や家族を大切に、守っていける (i)	0.63	0.12	-0.00	0.42	4.3	0.98
26.	人に思いやりを持てる (h)	0.61	0.26	-0.22	0.51	4.4	0.93
17.	人の忠告や批判にすなおに耳を傾けられる (h)	0.61	0.12	0.01	0.40	4.0	1.03
15.	良いこと悪いことの区別がはっきりできる (a)	0.60	0.31	0.06	0.47	4.1	0.99
30.	自分の職業 (仕事) にまじめに取り組んでいる (g)	0.56	0.18	0.12	0.37	4.1	0.97
31.	自分の意見をはっきりと言える (d)	0.55	0.34	-0.06	0.43	4.3	0.91
11.	働いて経済的に自立した生活ができる (i)	0.55	0.29	0.01	0.39	4.4	0.93
1.	人から頼りにされる (h)	0.54	0.11	0.01	0.31	3.9	1.15
21.	いろいろな範囲の人とスムーズにつき合える (h)	0.53	0.12	0.12	0.32	4.3	0.90
34.	自分の生き方・人生をつくっていける (f)	0.51	0.49	-0.04	0.51	4.3	0.92
20.	人生経験が豊かな (a)	0.48	0.30	0.22	0.38	4.2	1.04
32.	知識が豊かな (b)	0.48	0.26	0.27	0.38	4.2	1.02
24.	自分で決めたことを守り通せる (c)	0.47	0.43	-0.04	0.41	4.1	0.98
33.	人に迷惑をかけない (g)	0.46	0.40	0.26	0.46	4.1	1.06
9.	親から精神的に自立した (a)	0.44	0.42	0.05	0.39	4.0	1.19
23.	政治や社会について自分の意見を持っている (b)	0.44	0.28	0.29	0.36	3.7	1.13
12.	自分の子どもの気持ちを理解できる (j)	0.43	0.36	-0.36	0.46	4.3	1.03
18.	夢をもちつづけられる (a)	0.42	0.32	-0.19	0.32	4.3	1.06
4.	自分の感情をコントロールできる (a)	0.40	0.15	0.24	0.25	3.8	1.21
19.	困難な現実と直面しても自分の判断で解決 (f)	0.36	0.59	-0.02	0.49	4.1	0.93
5.	自分の悩みや迷いを自分で解決できる (f)	0.23	0.57	0.19	0.42	3.8	1.11
7.	子どもの意志を尊重できる (j)	0.30	0.53	-0.16	0.41	4.1	1.03
13.	世間体を気にしない (k)	-0.11	0.50	-0.08	0.28	3.3	1.21
34.	自分の生き方・人生をつくっていける (f)	0.51	0.49	-0.04	0.51	4.3	0.92
6.	やりたいことを自分の責任で選べる (f)	0.37	0.43	0.05	0.33	4.1	0.99
24.	自分で決めたことを守り通せる (c)	0.47	0.43	-0.04	0.41	4.1	0.98
9.	親から精神的に自立した (a)	0.44	0.42	0.05	0.39	4.0	1.19
33.	人に迷惑をかけない (h)	0.46	0.40	0.26	0.46	4.1	1.06
29.	むやみに他の人を信用しない (k)	-0.00	0.04	0.62	0.39	2.8	1.07



27. 本音と建前を使い分けられる	(k)	0.05	-0.12	0.61	0.40	2.8	1.23
14. 相手の社会的地位によって態度を変える	(k)	-0.17	-0.11	0.53	0.33	2.1	1.08
28. 投票、地域の活動、社会人としての役割	(g)	0.22	0.16	0.47	0.30	2.9	1.19

---

固有値	8.05	3.81	2.15
寄与率 (%)	44.5	21.1	11.9

第Ⅰ因子は、寄与率が45%と高かった。また、本調査で用いた、「おとなの人認知」の否定的側面以外のすべてのカテゴリーに属する項目の負荷量が高かった。負荷量の大きいすべての項目の平均評定値は3.7以上で、その多くは4.0以上であった。つまり、この因子と負荷量の大きい項目は、すべて目指す「おとな像」として自覚されている項目であった。以上のことから、この因子は、目指す「おとな像」の理想像・目標像と包括的に関係する因子であると考えられる。故に、この因子を『理想のおとな』因子と命名した。

第Ⅱ因子は、「自己決定」の4項目（No.19、5、34、6）に負荷量が高かった。それ以外に負荷量の高かったNo. 24、33の内容は、自己決定によって守るべきことがらと解釈できる。また、No. 13、9は自己決定の前提と、そして、No. 7は子どもの自己決定（意志）を尊重することと解釈できる。故に、この因子を『自己決定』因子と命名した。

また、負荷量の大きい各項目の平均評定値は、No. 13の3.3以外は、4.0前後であった。つまり、これらの項目は、すべて目指す「おとな像」として自覚されている項目であった。したがって、『自己決定』因子は、『理想のおとな』因子とともに、目指す「おとな像」として理想像・目標像を構成する因子であるといえよう。

第Ⅲ因子は、負荷量の大きい4項目中3項目がおとなの人に対する否定的評価の回答から選んだ「おとなの人認知」の項目であった。また、4項目とも平均評定値が3.0未満であり、目指す「おとな像」として自覚されていない項目であった。故に、『目指されないおとな』因子と命名した。

以上の様に、「精神的自律」、「生活的自立」そして、「対人的・社会的関わり」の3つの側面は、それぞれ独立した次元（側面）として抽出されなかった。3つの側面は今回の対象者においては1つの次元としてとらえられていた。つまり、『理想のおとな』因子として1つの側面に包括されていた。ただし、「精神的自律」の下位カテゴリーととらえていた「自己決定」は、『理想のおとな』因子に対しても負荷量の大きい項目を含みながら独立した1つの次元として、つまり『自己決定』因子として抽出された。

## 2) 目指す「おとな像」（『理想のおとな』因子）と2つの体験の関係

3つの因子が抽出されたが、前述した様に、『理想のおとな』因子は、目指す「おとな像」の理想像・目標像と包括的に関係する因子であると考えられる。したがって、「目指すおとな像」の形成に、どのような「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」が寄与しているかの検討を以下の様に行った。

『理想のおとな』因子と2つの共同体験との関係を重回帰分析によって分析した。『理想のおとな』因子に0.40以上の負荷量を持つ24項目の評定点の合計点を被説明変数、共同体験10項目と処遇体験13項目の、計23項目それぞれの評定点を説明変数として重回帰分析を行なった。被説明変数、説明変数のいずれかに欠測値を持つ被験者のデータは分析対象から除外した。その結果、分析対象者は199名であった。その結果は、表2に示してある。

表2. 目指す「おとな像」と2つの体験との回帰分析の結果

重回帰係数：0.34      決定性係数：0.11  
AIC : 364.47      Cp statistic : -5.11

◎ 分散分析表

	自由度	平方和	平均平方	F 値
回帰	5	8.76	1.75	4.9846*
残差	193	67.80	0.35	
全体	198	76.56		

◎ 最終モデルで採用された2つの体験の偏回帰係数、偏相関係数、F 値

	項 目	偏回帰係数	偏相関係数	F 値
共同体験	5. 料理や買物などの家事手伝い	0.07689	0.16136	5.15913*
処遇体験	7. おとな同士の態度で接する	0.08720	0.17248	5.91772*
処遇体験	11. 祭りや行事などで責任ある地位	-0.11912	-0.18448	6.79957*
処遇体験	8. ボランティア活動で責任ある地位	0.07797	0.12803	3.21631
処遇体験	12. 年下の者の世話をまかせる	0.05935	0.12365	2.99677
	定数項	3.52641		

\*: p. < 0.05

採用したモデルは、説明変数として共同体験の1項目と処遇体験の4項目からなり、全体として有意に被説明変数を予測していた。ただし、重相関係数は0.34と高いとはいえない。また、決定係数は0.11と低かった。

偏回帰係数が有意であったのは、共同体験の「5. 家事手伝い」、処遇体験の「7. おとな同士の態度」、「11. 行事」の3項目であった。

### 3) 「対おとな認知」の因子分析

「対おとな認知」の質問項目35項目を主因子法によって因子分析し、固有値が1以上の因子4因子を抽出した。その後この4因子をバリマックス回転した。欠測値を含む被験者は分析から除外した。分析対象者数は、195名であった。

各因子の因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目、およびそれらの項目の評定値の平均値と標準偏差を表3に示した。この4因子によって、全分散の約84%を説明することができた。

表3. 「対おとな認知」の因子分析の結果と評定値の平均及び標準偏差  
項 目 (カテゴリー) F. 1 F. 2 F. 3 F. 4 共通性 MEAN S.D.

34. 自分の生き方・人生をつくっていきける	(f) :	0.71	0.17	0.02	0.02	: 0.55	3.4	1.10
32. 知識が豊かな	(b) :	0.70	0.08	0.13	-0.14	: 0.54	3.6	0.98
26. 人に思いやりを持てる	(h) :	0.65	0.34	0.13	-0.02	: 0.57	3.3	1.07
35. 物事を冷静に判断し、行動できる	(f) :	0.64	0.35	0.02	-0.06	: 0.54	3.5	0.97
31. 自分の意見をはっきりと言える	(d) :	0.64	0.09	0.18	0.03	: 0.45	3.5	1.09
30. 自分の職業（仕事）にまじめに取り組んでいる	(g) :	0.61	0.31	-0.04	-0.25	: 0.55	3.9	0.99
25. 自分の職業にやりがいを持って取り組んでいる	(g) :	0.59	0.11	0.22	-0.22	: 0.46	3.3	1.16
24. 自分で決めたことを守り通せる	(c) :	0.58	0.25	0.33	-0.06	: 0.53	3.1	1.01
20. 人生経験が豊かな	(a) :	0.53	0.10	0.23	-0.27	: 0.42	3.7	1.06
16. 自分の家庭や家族を大切に、守っていきける	(i) :	0.52	0.36	-0.09	-0.17	: 0.45	3.8	1.05
1. 人から頼りにされる	(h) :	0.51	0.18	0.14	-0.00	: 0.32	3.3	1.10
33. 人に迷惑をかけない	(h) :	0.50	0.24	-0.08	0.08	: 0.33	3.4	1.13
2. 社会的モラル・常識を持っている	(b) :	0.49	0.19	0.15	0.07	: 0.31	3.4	1.11
22. 自分の良いところ、悪いところを判断できる	(e) :	0.48	0.24	0.21	-0.10	: 0.35	3.2	0.92
15. 良いこと悪いことの区別がはっきりできる	(a) :	0.48	0.31	0.08	-0.11	: 0.36	3.6	1.14
28. 投票、地域の活動、社会人としての役割	(g) :	0.48	0.06	0.11	-0.36	: 0.38	3.5	1.14
21. いろいろな範囲の人とスムーズにつき合える	(h) :	0.46	0.15	0.25	-0.30	: 0.41	3.6	0.96
23. 政治や社会について自分の意見を持っている	(b) :	0.46	-0.03	0.25	-0.32	: 0.39	3.4	1.13
12. 自分の子どもの気持ちを理解できる	(j) :	0.46	0.50	0.24	0.15	: 0.55	3.1	1.20
7. 子どもの意志を尊重できる	(j) :	0.43	0.48	0.34	0.18	: 0.58	2.9	1.15
3. 自分の言ったことや行なったことに責任を持てる	(c) :	0.41	0.39	0.28	0.08	: 0.42	2.9	1.11
11. 働いて経済的に自立した生活ができる	(i) :	0.41	0.28	-0.41	-0.23	: 0.48	4.2	1.07
6. やりたいことを自分の責任で選べる	(f) :	0.41	0.57	0.12	0.05	: 0.53	3.2	1.07
17. 人の忠告や批判にすなおに耳を傾けられる	(h) :	0.41	0.45	0.18	0.22	: 0.46	2.9	1.10
5. 自分の悩みや迷いを自分で解決できる	(f) :	0.10	0.67	0.18	-0.12	: 0.51	3.3	0.95
6. やりたいことを自分の責任で選べる	(f) :	0.41	0.57	0.12	0.05	: 0.53	3.2	1.07
4. 自分の感情をコントロールできる	(a) :	0.14	0.50	0.23	-0.14	: 0.35	3.3	1.04
12. 自分の子どもの気持ちを理解できる	(j) :	0.46	0.50	0.24	0.15	: 0.55	3.1	1.20
7. 子どもの意志を尊重できる	(j) :	0.43	0.48	0.34	0.18	: 0.58	2.9	1.15
17. 人の忠告や批判にすなおに耳を傾けられる	(h) :	0.41	0.45	0.18	0.22	: 0.46	2.9	1.10
19. 困難な現実直面しても自分の判断で解決	(f) :	0.31	0.44	0.24	-0.32	: 0.47	3.2	0.99
18. 夢をもちつづけられる	(a) :	0.21	0.11	0.61	0.07	: 0.45	2.7	1.15
8. 世間のうわさ話や悪口を言わない	(k) :	0.10	0.29	0.55	0.13	: 0.42	2.3	1.12
13. 世間体を気にしない	(k) :	0.10	0.20	0.48	0.23	: 0.34	2.4	1.17
10. 人のために自分の不利益になることでもやれる	(h) :	0.34	0.27	0.47	0.06	: 0.42	2.7	1.17
11. 働いて経済的に自立した生活ができる	(i) :	0.41	0.28	-0.41	-0.23	: 0.48	4.2	1.07
27. 本音と建前を使い分けられる	(k) :	0.10	0.06	-0.11	-0.64	: 0.44	3.9	1.09
29. むやみに他の人を信用しない	(g) :	0.00	0.00	-0.09	-0.56	: 0.33	3.4	0.96
14. 相手の社会的地位によって態度を変える	(k) :	0.02	0.01	-0.22	-0.48	: 0.29	3.8	1.26

固有値 : 7.32 3.49 2.40 2.07

寄与率 (%) : 40.6 19.3 13.3 11.5



第Ⅰ因子は、寄与率が約41%であり、因子負荷量の絶対値が大きな（因子負荷量0.40以上、以下同様）項目には「おとなの人認知」の否定的側面の以外の、すべてのカテゴリーに属する項目のほとんどが含まれていた。このことから、この因子は肯定的なおとな認知と包括的に関係する因子であると考えられる。故に、この因子を『肯定的なおとな』の因子と命名した。因子負荷量の大きい項目24項目中22項目の平均評定値は 3.0以上であった。つまり、そうした肯定的な特性を持つおとなは多いとされていた。

第Ⅱ因子は、寄与率が約19%で、因子負荷量の絶対値が大きな項目にはNo. 4、5、6、7、12、17、19の様に「自己決定」に関する項目が多かった。「対子ども」に関する項目が含まれているが、この項目は「子どもの自己決定を尊重する」という様に解釈することが可能である。したがって、第Ⅱ因子を『自己決定』の因子と命名した。因子負荷量の大きい項目7項目中5項目（4、5、6、12、19）の平均評定値は 3.0以上であった。またこれらの7項目中4項目（6、7、12、17）は、第Ⅰ因子にも負荷量が大きかった。

第Ⅲ因子は、寄与率が約13%で、因子負荷量が大きい項目にはNO. 8、10、11（因子負荷量負）、13、18といった対人関係を良好に保ちながらもそうした対人関係に左右されないおとなを思わせる項目があった。このことから、第Ⅲ因子を『対人関係における自立』の因子と命名した。因子負荷量の絶対値が大きい項目5項目中4項目（8、10、13、10）の平均評定値は 3.0以下であった。またこれら5項目中1項目（11）は第Ⅰ因子にも負荷量が大きかった。

第Ⅳ因子は、寄与率が約11%で、因子負荷量が大きい項目はNO. 14、27、29であった。これらの項目は、先の調査で、おとなに対する否定的評価の中に現われた回答を否定的ニュアンスを弱めて項目化したものである。したがって、これらの項目の因子負荷量がすべて負であったので、因子軸の方向を逆転して、第Ⅳ因子を『対人関係における否定的なおとな』の因子と命名した。因子負荷量の大きい3項目すべての平均評定値は 3.0以上であった。つまり、こうした否定的な特性を持つおとなは多いとされていた。なお、この因子に対して因子負荷量が大きい項目は、他のどの因子に対しても負荷量は大きくなかった。

#### 4) 「対おとな認知」（「肯定的な『対おとな認知』」の因子）と2つの体験の関係

第Ⅰ因子の寄与率が約41%と大きく、因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目が24項目あったことから、この因子は肯定的「対おとな認知」と包括的に関係する因子であり、これらの24項目に一次元的構造があると判断した。そこで、これら24項目の評定値を合計し、それを『肯定的な「対おとな認知」得点』とした。『肯定的な「対おとな認知」得点』を被説明変数、「おとなとの共同体験」の10項目、および「おとな処遇体験」の13項目、計23項目を説明変数として重回帰分析を行なった。被説明変数、説明変数のいずれかに欠測値をもつ被験者のデータは分析対象から除外した。分析対象数は187名だった。

結果は表4に示してある。採用されたモデルに含まれる説明変数は、共同体験では「3. 対話・相談」、「5. 家事」、「6. 趣味」であり、処遇体験では「1. 進路」、「6. 年下のも

のがあてにする」であった。いずれの変数の偏回帰係数および偏相関係数も正であり、採用したモデルの説明変数の評定点と『肯定的な「対おとな認知」得点』との間に正の相関関係が存在することが示された。この回帰モデルは全体として有意であり、重相関係数は0.43、決定係数は0.19で、説明変数として採用された5つの変数によって『肯定的な「対おとな認知」得点』の全分散の約19%が説明された。偏回帰係数が有意であったものは、「共同体験」の「5. 火事」、「6. 趣味」、「処遇体験」の「1. 進路」の3変数であった。

表4. 「対おとな認知」と2つの体験の回帰分析の結果

重回帰係数： 0.43      決定性係数： 0.19  
AIC   :   1547.01   Cp statistic： -3.52

◎ 分散分析表

	自由度	平方和	平均平方	F 値
回帰	5	9257.13	1851.43	8.4236*
残差	181	39782.10	219.79	
全体	186	49039.23		

◎ 最終モデルで採用された2つの体験の偏回帰係数、偏相関係数、F 値

項 目	偏回帰係数	偏相関係数	F 値
共同体験 6. 趣味やゲーム・スポーツ	2.73523	0.21945	9.15772*
共同体験 5. 料理や買物などの家事手伝い	1.87847	0.15947	4.72287*
処遇体験 1. 自分の将来や進路の決定をまかせる	2.39421	0.14541	3.90974*
処遇体験 6. 年下の者があてにする	1.66714	0.11330	2.35370
共同体験 3. 対話・相談	1.22763	0.10916	2.18262
定数項	46.15567		

\* ; p. < 0.05

## Ⅳ. 考察

### 1) 目指す「おとな像」の諸側面

「精神的自律」、「生活的自立」、「対人的・社会的関わり」の3つの側面は、それぞれ独立した次元（側面）として抽出されなかった。3つの側面は今回の対象者においては1つの次元としてとらえられていた。その理由としては、以下の事が考えられる。

つまり、回答者が自由記述で回答に込めた意味と、その回答に対する調査者の解釈とそれに基づいた分類にずれがあったのではなかということである。例えば、自由記述の回答「親から精神的に自立すること」（本調査項目ではNo. 9として項目化してある。以下のナンバーは同様の意味）は精神的自立に着目し「精神的成熟」に分類し、回答「働いて経済的に自立した生活ができること」（No. 11）は、経済的自立に着目し「生活的自立」に分類した。

しかし、両者が心理的には関係しあっていることは考え得ることであり、本研究の結果はそのことを示していた。つまり、経済的に自立を達成することは(達成することによって)、親から精神的に自立を達成する(達成しようとする)こと、という心理的關係が成立しているのである。また、同様なことは、例えば次のケースにも当てはまるであろう。つまり、「自分の感情をコントロールできること」(No. 4) [精神的成熟]は「人に迷惑をかけないこと」(No. 33) [対人的関わり]であり、またその逆の關係でもある。

この様な關係が成立している場合でも、自由記述の回答にその關係が明確に表現されないで、前述の2通りの表現の様になされている場合が多いと思われる。実際、この種の關係を表現していると思われる記述は少なく、前述の例の様な記述が多かった。したがって、その關係が成立している場合でも、その關係は回答表現からは読み取れず、前述の手続きで、別々のカテゴリーに分類してしまったのではないと思われる。そして、その様な分類結果を基に、目指す「おとな像」・人間像の主要な側面として3つの側面を指摘していたのではないだろうか。以上の理由により、本研究結果と荒尾・菊地<sup>3</sup>の指摘が異なったのではないだろうか。

次に抽出された3つの因子について検討する。まず、抽出された3つの因子(側面)をすべて、目標像・理想像としての目指す「おとな像」の側面として位置づけることが適切か否かについて検討する。

『目指されないおとな』因子は、次の理由から目標像・理想像としての目指す「おとな像」の側面として位置づけることは、適切ではないと考える。何故なら、この因子に負荷量が大い項目の評定点の平均値は3.0未満であり、目指す「おとな像」の特性として自覚されていないからである。

一方、他の2つの因子はその特性として自覚されている。したがって、目指す「おとな像」の側面としては、『理想のおとな』因子で説明される大きな側面と、『自己決定』因子で説明される側面から構成されていると考えるのが適切ではないだろうか。そして、目指す「おとな像」の多くの特性は、『理想のおとな』の側面にみられる様に、個々に切り離されて自覚されているのではなく、相互に關係付けられて自覚されているのではないだろうか。

しかし、この点に関して次の様な可能性もある。つまり、目指す「おとな像」特性の自覚が、異なった因子として抽出されるほどには分化していないため、第1因子(『理想のおとな』因子)としてまとまった可能性もある。また、質問項目の精度が低く、分化しているにもかかわらず、それを測定できなかった可能性もある。この点に関して、調査対象の拡大、調査項目の検討によって、更に検討していく必要がある。

「精神的自律」の下位カテゴリーとしていた[自己決定]が、独立した1つの次元として抽出されたことについて検討する。このことは、自分の抱えている問題を自分で解決できることや、自分の意志や行動を自分で選択できるという特性(群)が、目指す「おとな像」の中で1つの独自の側面として位置づいているということである。

この結果と、荒尾・菊地<sup>3</sup>で検討した「おとな処遇志向性発生状況」（おとな扱いされた時・場面）、「おとなになることへの志向性発生状況」（おとなになりたいと思う時・場面）の結果を対応させると、以下の理由から、次の事が推測されるのではないだろうか。

その理由は、2つの志向性発生状況として共通に多くあげられたのは、自分の行動を選択する時やその選択がなんらかの障害に出会った時などの＜自己決定の遂行・阻止＞場面であったからである。そして、この傾向は、本研究の『自己決定』の側面が、おとなになっていくことへの青年期独自の動機と関連している可能性があることを、示唆しているのではないだろうか。今後、更に検討していく必要がある。

## 2) 目指す「おとな像」（『理想のおとな』の側面）の形成と2つの体験の関係

目指す「おとな像」（『理想のおとな』の側面）の形成と2つの体験の関係について検討する。

『理想のおとな』の側面の形成に影響を与えている体験群（採用されたモデルの説明変数総体）には、次の体験が含まれていた。共同体験の「5. 家事手伝い」、処遇体験の「7. おとな同士の態度」、「8. ボランティア活動」、「11. 行事」、「12. 年下の者の世話」の5つの体験である。本研究では共同体験として10体験、処遇体験として13体験を取り上げた。しかし、それぞれの体験の中で、『理想のおとな』の側面の形成に影響を与えていることを示唆していたのは少数の体験であった。

次に、その中で『理想のおとな』に対して、個々の影響が有意なものとして示唆された体験について検討する。「おとなとの共同体験」の「5. 家事手伝い」は、親（やその他の家族、近所のおとな）と家事を通して様々に交流する場面である。家事は、被調査者として自分の毎日の生活に直接に関係している活動であり、自分が取り組む家事を通して、家庭内での自分の「地位」や責任を自覚する活動であろう。あるいは、その様な活動であったろう。その意味で、自我関与の高い活動であり得るし、自分の取り組んでいる家事において親と対等の関係であり得る活動であろう。だとすれば、その様な特質を持っている場合の家事体験が多いほど、親の家事に取り組む姿や自分への態度を通して、彼らは自分の目指す「おとな像」を形成しやすかったのではないだろうか。

「おとな処遇体験」の「7. おとな同士の態度」は、おとなの人から、対等な関係で、あるいはその関係を象徴する敬語を使用して、被調査者が処遇される体験である。その関係の中では、相手のおとなは子どもに対する時の姿ではなく、おとなとしての姿で振舞い、一方彼らはおとなとしての言動が要求されたであろう。だとすれば、その様な体験が多いほど、その関係の中で、大学生は相手からおとなの特性を学び、おとなの自覚を高め、おとなとしての振舞いをしながら、自分の目指す「おとな像」を形成しやすかったのではないだろうか。

次に、「11. 行事」であるが、この項目の偏回帰係数は負であった。つまり、地域の祭りや行事などで責任ある地位につく経験が少ないほど「おとな像」を形成しやすいという



結果である。常識的には逆の関係が推測されるが、何故このような関係が示唆されるのかは不明である。

以上、『理想のおとな』の側面の形成に及ぼす「おとなとの共同体験」と「おとな処遇体験」の影響を検討してきた。しかし、重相関係数、決定係数、偏回帰係数とも低く、『理想のおとな』の側面の形成に強く影響を与えている体験を把握できたとはいえない。

本結果が、体験項目の選定、項目の精度に依存しているものなのか、あるいは『理想のおとな』の側面とは実際に強い関係がないためなのか、またその両者によるものかは、本研究では判断できない。したがって、次の点を検討し、更に調査を重ねていく必要がある。まず、個々の項目の精度を高める必要がある。そして、更に、2つの体験の関係に考慮した項目作成も必要である。つまり、共同体験は場面を、処遇体験は内容を問題にしており、両者を関連してとらえられる項目作成も必要である。また、その場面・内容に関係するのはどのような人なのかも検討する必要もある。そして、同時に『理想のおとな』の側面で指摘した検討課題と関連させながら、目指す「おとな像」・人間像の形成と体験の関係を分析していく必要がある。

### 3) 「対おとな認知」の諸側面

今回の調査では、「対おとな認知」は1.『肯定的おとな』、2.『自己決定』、3.『対人関係における自立』、4.『対人関係における否定的おとな』の4つの側面から構成されていると言えよう。第Ⅱ因子と第Ⅲ因子の負荷量の絶対値が大きかった項目の一部が第Ⅰ因子においても負荷量の絶対値が大きかった。このことは、『肯定的おとな』、『自己決定』および『対人関係における自立』の3つ側面が互いに重なり合う内容を持ちながらも分離されたことを示唆している。第4の側面は、第Ⅳ因子に負荷量大きい項目が他の因子に対しても負荷量大きいということがなく、前者3つの側面とは独立した側面であると言えよう。

『自己決定』の側面は目指す「おとな像」において独自の側面として位置づいていたが、「対おとな認知」においても周囲のおとなを評価する際の重要な側面としてとらえられていることを示唆している。また、目指す「おとな像」における『自己決定』の側面と「対おとな認知」における『自己決定』の側面は互いに重なり合いながらも、独自の内容を持っていると考えられる。因子負荷量の大きい項目で目指す「おとな像」だけにあらわれたものは、NO. 13、24、3であり、「対おとな認知」にだけあらわれたものは、No. 4と17であった。目指す「おとな像」における『自己決定』は他者との関係をあまり考慮にいない、いわば「独立独歩」といった内容を含んだ『自己決定』であるのに対し、「対おとな認知」における『自己決定』は、他者との良好な関係を取り結んだ上での『自己決定』であろう。

次に各因子の負荷量大きい項目の評定点の平均値から、青年が周囲のおとなをどの様に評価しているかを考察する。第Ⅰ因子に負荷量大きい項目のほとんどは、その評定点の平均が3.0以上だった。第Ⅱ因子でも負荷量大きい項目の多くは、その評定点の平均



が3.0以上だった。『肯定的おとな』の側面と『自己決定』の側面では、おとなは肯定的に評価されていると考えられる。他方、第Ⅲ因子の負荷量が高い項目の評定値の平均は3.0以下であり、第Ⅳ因子の負荷量が高い項目の評定値の平均は3.0以上であった。このことは、『対人関係における自立』の側面と『対人関係における否定的おとな』の側面で、おとなはあまり肯定的に評価されていないことを示唆している。

ここで、「対おとな認知」の諸側面の評価と荒尾・菊地<sup>4</sup>の「おとなのよいところ・見習いたい点」と「おとなの悪い点・見習いたくない点」の結果とを比較検討する。「おとなのよいところ・見習いたい点」では、今回の「対おとな認知」調査で『肯定的おとな』の側面を構成していると思われる「精神的成熟」(No. 18、20)、「知的深まり」(No. 2、23、32)、「社会的関わり」(No. 25、28、30)、「生活的自立」(No. 11、16)、「責任」(No. 3、24)があげられ、また『自己決定』の側面を構成していると考えられる「自己決定」(No. 6、34、35)、「対子ども」(No. 7、12)があげられた。他方、「おとなの悪い点・見習いたくない点」では、『対人関係における自立』の負の側面を構成していると思われる「現実主義的」、「世間体」、「自己中心的」などがあげられた。また、『対人関係における否定的おとな』の側面を構成すると思われる「本音と建前・嘘」、「対他不信」、「おべっか・権威主義」などがあげられた。以上の様に今回の調査で抽出された「対おとな」認知の諸側面の評価と「おとなのよいところ・見習いたい点」および「おとなの悪い点・見習いたくない点」の調査で得られた結果とはかなりよく一致しているといえよう。

さて、「対おとな認知」でも目指す「おとな像」と同様に「肯定的な『対おとな認知』」の因子と考えられる大きな因子が抽出され、調査者が先行研究において分類したカテゴリーに関わる因子が抽出されなかった。本調査からは明確な結論を出せないが、次の2つの可能性があるだろう。第1に、それらのカテゴリーが互いに関連しあっているという可能性である。第2に、質問紙の項目選択や精度が不十分だったために、それらのカテゴリーに関わる因子を分化できなかったという可能性である。質問紙の項目選択とあわせて今後検討すべき課題である。

#### 4) 肯定的な「対おとな認知」の形成と2つの体験の関係

肯定的な「対おとな認知」を予測するために採用された「おとなとの共同体験」と「おとな処遇体験」の項目5項目のうち、偏回帰係数が有意であったものは、「共同体験」の「5. 家事」、「6. 趣味」、「処遇体験」の「1. 進路」の3変数であった。

荒尾・菊地<sup>4</sup>の「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」、「おとなとの共同体験志向性」、「おとな処遇志向性発生状況」の調査で大学生の被験者が最も多くあげたものは、「おとなとの共同体験」と「おとな処遇体験」では＜アルバイト＞、「おとなとの共同体験志向性」では＜余暇活動＞と＜仕事＞、「おとな処遇志向性発生状況」では＜自己決定の遂行・阻止＞であった。前調査では「おとなとの共同体験」、「おとな処遇体験」、「おとなとの共同体験志向性」で最も多くあげられた＜アルバイト＞、＜仕事＞が、本調査では「肯定的な『対

おとな認知』を予測する変数として採用されなかった。そして、こうした事柄にまったくあげられなかった「共同体験」の「5. 家事」が採用された。他方、「共同体験」の「6. 趣味」は『肯定的おとな認知』と有意に関連していた。このことは、青年が体験する頻度が高い「共同体験」や「処遇体験」や志向する頻度が高い「共同体験」が、かならずしも「肯定的な『対おとな認知』」に関係しているとは言えないことを示している。このことと、重回帰係数が有意であったもののあまり高くなかったこと、先の調査で「おとなとの共同体験」、「おとな処遇」、「おとなとの共同体験志向性」あまり多くの事柄があげられなかったことを考慮すると、「共同体験」、「処遇体験」以外の要因と「肯定的な『対おとな認知』」との関係も今後検討する必要がある。

前述のように、荒尾・菊地<sup>4</sup>の「おとな処遇志向性発生状況」で最も多くあげられたものは<自己決定の遂行・阻止>であった。『肯定的おとな』と「処遇体験」の「1. 進路」との間に有意な関連があったことは、おとな処遇志向性が発生する状況でのおとな処遇が肯定的な「対おとな認知」を形成することに寄与していることを示唆している。すなわち、青年が単におとなとの共同体験を頻繁に行なうことやおとな処遇を頻繁に受けること、志向性を強く持つおとなとの共同体験を頻繁に行なうことが直接に肯定的な「対おとな認知」形成に寄与しているのではなく、そうした共同体験やその中でなされるおとな処遇が青年のもつおとな処遇志向性の内容と一致していることが、肯定的な「対おとな認知」形成に寄与しているということを示唆するものであろう。このこととの関連で、「自分の都合に合わせて、子供をおとな扱いしたり子供扱いしたりする」といった青年のおとなに対する不満が生じているのではなかろうか。また、「1. 進路」は「自己決定」と強く関わっているおとな処遇体験であり、自己決定を必要とする場面や事柄でのおとな処遇が肯定的な「対おとな認知」を形成することに寄与していることが示唆されるだろう。

## 参考文献

1. 荒尾貞一・菊地則行 1986 「青年の『おとな』像に関する研究 ― 大学生を対象とした予備的調査 ―」『北里大学教職課程研究年報』 第8号 56-70
2. 荒尾貞一・菊地則行 1986 「青年期『おとな』像研究 1-2」 東北心理学会第40回大会
3. 荒尾貞一・菊地則行 1987 「青年期の人間像と『おとな』志向性の研究」『北里大学教職課程研究年報』 第9号 11-29
4. 荒尾貞一・菊地則行 1987 「青年期の『おとな』志向性の研究」 東北心理学会第41回大会
5. 菊地則行・荒尾貞一 1986 「青年期の『おとな』像研究 1-1」 東北心理学会第40回大会

6. 古市裕一 1984 「成人性基準に関する心理学的研究」『岡山大学教育学部研究集録 10巻』
7. 津留宏 1968 「成人度の発達とその規定因」 依田新編 『現代青年の人格形成』 金子書房
8. 田中豊、垂水共之、脇本和昌 編 1984 『パソコン統計ハンドブックⅡ 多変量解析編』 共立出版